群	E03 - 03
教セ	平16.220集

互いを認め合い、高め合う学級集団づくり

── 学校行事をつなぐ「一致団結カード」の活用を通して ──

特別研修員　　北原　洋　　（前橋市立芳賀中学校）

《研究の概要》

本研究は、中学校１年生を対象に、体育大会、遠足、合唱コンクールの連続する３つの学校行事への取組とその振り返りを通して、生徒相互のよさや努力を認め合いながら、目標を達成しようと高め合う学級集団が育成できることを実践を通して明らかにしようとしたものである。各行事の橋渡し役としてカードを用い、生徒が目標を明確化し、目標意識を持続することで、互いに協力し合うことに価値を見出す活動を行った。

【キーワード：学級経営　中学校　学校行事　カード　学級活動】

Ⅰ　主題設定の理由

本学級（第１学年１組）は男子16名、女子12名、計28名の学級である。大半がＡ小学校の生徒であるが、男女各１名ずつ小規模のＢ小学校の生徒がいる。明るく元気があり、男女を問わず仲が良く、楽しい雰囲気の中で生活している。授業にも活発に取り組み積極的な挙手発言ができる。しかし、元気がありすぎて授業中脱線したり、清掃等の当番活動で自分の役割に責任を持てない部分も見られた。また、表面的に仲が良くても悪口やからかい等相手を思いやれない言動が見られた。５月中旬に行った林間学校では、仲間と協力して活動に取り組むことの楽しさや、集団で生活するときの規律の大切さなどを学んだ。しかし、お互いのよさや努力を認め合い励まし合いながら、集団として成長していこうとする意識は不足していた。このような生徒に対して、学校行事を通して、学級としての課題に協力して取り組み、目標を達成しようとすることでよりよい集団形成を図ることが、有効であると考えた。

学校行事は、学級が集団としてどのような力をつけてきたか、どこまで成長したかを確認し、伸ばしたい力を鍛える場として活用することができる。学校行事に向けて、個々の生徒はさまざまな目標を持ち、その目標の達成を目指して活動する中で変容し、成長していく。そこで、いくつかの学校行事を結びつけることで、生徒の変容を段階的に持続させ、望ましい学級集団を形成することができると考えた。

本研究では、個、小集団（グループ）、大集団（学級）と、生徒の参加の形態が変化する体育大会、遠足、合唱コンクールの３つの学校行事を選んだ。カードを活用して事前・事後の指導をすることで、連続するこれらの学校行事を結びつけることができると考えた。比較的短期間に連続して行われる学校行事に取り組むことで、生徒が集団の中の自分の成長を自覚するとともに、学級の仲間の成長を認め合いながらよりよい学級集団を目指し高まり合うことができると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

学校行事の指導において、「一致団結カード」を活用し各行事を関連付けて指導することで、お互いのよさや努力を認め合い、目標に向けて高め合える学級集団を目指そうとする生徒を育成できることを、実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

1　体育大会において、カードを使って自分の努力点を明確にしながら活動し、振り返りを通して応援し合う関係を育むことで、自分の役割を自覚し、仲間の努力を認められるようになるだろう。

2　遠足において、体育大会の振り返りをもとに、カードを使って自分の努力点を明確にしながら活動し、振り返ることで、仲間の取組を認め、仲間の手助けができるようになるだろう。

3　合唱コンクールにおいて、体育大会、日光遠足の振り返りをもとに、カードを使って自分の努力点を明確にしながら活動し、交流し合うことで、学級のために自分の役割を見出し、協力しながら目標を達成しようとするだろう。

IV　研究の内容

1　基本的な考え方

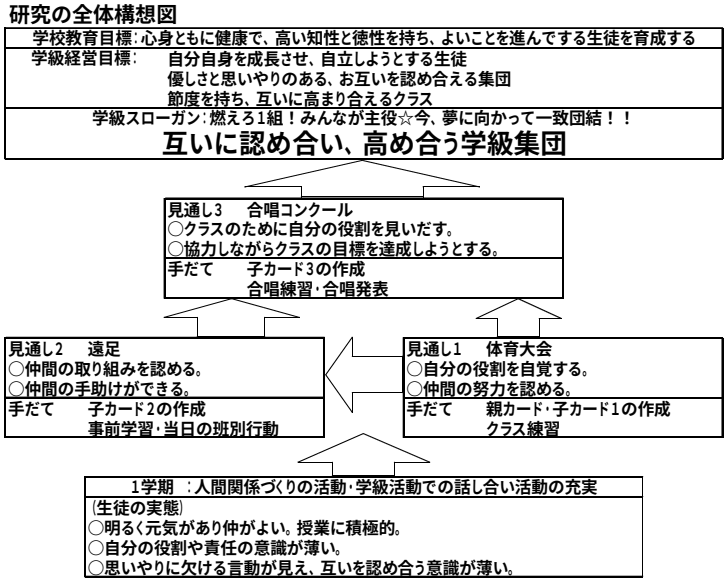
(1)　「互いを認め合い、高め合う」とは

学校生活の中では、生徒一人一人のよさや努力が、目に見える形で表れるものである。「互いを認め合い」とは、そうした「生徒のよさや努力をお互いに見つけ認められる、温かなまなざしのある人間関係を築き合えること」と考えた。また「高め合う」とは、そうした人間関係を基盤にして、「協力し合いながら学級で一丸となって目標を達成しようとすること」と考えた。学校行事の振り返りの場面で、お互いのよさや改めるべき点を指摘し合いながら意見交流することで､集団をよりよくするために積極的に関わり合える生徒を育むことを目指している。

(2)　「学校行事をつなぐ」ことの必要性

学校行事に向けて、生徒は自己の目標の達成を目指すが、行事後、生徒の変容が元に戻ってしまうことがある。そこで、行事を関連付けて、連続した取組を促すことで、生徒の変容を持続でき、より大きな変容を期待できると考えた。本研究では、体育大会、遠足、合唱コンクールの３つの行事を取り上げ、協力性という観点で関連付けた。

研究の全体構想図



ア　体育大会は10月上旬に行われる、学級対抗行事である。生徒は個人種目と、学級全員で取り組む全員リレーおよび学年遊競技に参加する。競技へ参加することで個人の役割は明確になりやすい。そこで、カードを使って、学級の仲間がどんなことを頑張ろうとしているのかを事前に交流させることで、相手の努力を見つめる観点が得られると考えた。そして練習や当日の競技の中で互いに応援し、励まし合えるようになると考えた。

イ　遠足は､10月下旬に行われる。４～５人でグループを作り日光東照宮周辺の散策を行う。班別行動を行うため、小グループ内での協力が大切になる。事前学習や当日の班別行動の

中で見られた班員の協力する姿と協力してもらった時の気持ちについて、カードを使って意見交流し合うことで、集団への関わり方と協力することの大切さを学ぶことができると考えた。

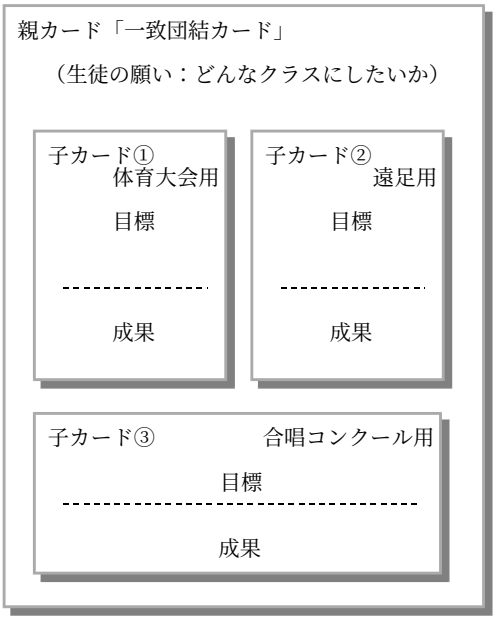
ウ　合唱コンクールは11月中旬に行われる、学級対抗行事である。約１ヶ月間練習を行う。指揮者や伴奏者の他は、自分の目標を比較的自由に設定できるので、学級のためにどのように貢献できるかをカードに記入する。練習の過程で仲間や自分の取組について振り返ることで、よりよい合唱にするために、積極的な関わりができるようになると考えた。

(3)　「一致団結カード」について（資料１）

それぞれの学校行事をつなぐ役割をする。一つの行事で感じたことを整理し、次の行事の目標を明確にするためのカードである。行事の事前指導と事後指導で作成し、生徒一人一人の意識を高め、生徒相互の気持ちを知り合う活動を行う。学級が一つにまとまるようにという願いから学級スローガンの文言を取って「一致団結カード」と生徒が名付けた。

カードは、台紙となる親カードと、各行事に対応した３枚の子カード①②③で１セットとする。親カードには、どんなクラスにしたいかという生徒の願いを記入させる。子カードには、願いを達成するための各行事での目標と、行事後の成果を記入する。行事の指導に併せて、親カードに小カードを張り込んでいく。カードは教室後部に掲示し、いつでも生徒がお互いに見合えるようにする。また、生徒の考えを具体化するために、カードに併せて、事前アンケートや振り返りシートも作成し使用する。

資料１　「一致団結カード」のモデル



2　実践の概要及び結果と考察

資料２　「一致団結カード」の「願い」の記述

・協力（１２人）・みんなで（８人）・団結（６人）
・仲良く（４人）・信頼（３人）
・助け合い、一生懸命（２人）
・応援し合える・認め合える、優しく、
　気持ちがわかる、思いやり、LvUP（各１人）
　　※一人の生徒が重複して回答したものも含む。

二学期を迎え、各行事の準備が始まる前に、学級活動で学校行事の意義を話し合った。その中で、学校行事は一人で活動したのでは身に付かない様々な価値を、学級の仲間と共に身に付け、成長していく場であることを確認した。そして、体育大会、遠足、合唱コンクールの３つの行事を通して、どのような学級に成長していきたいかを発表し合い、「一致団結カード」に各自の願いを書き入れた。キーワードを抽出すると資料２のような言葉が見られた。

考察は、学級全体の活動の様子、「一致団結カード」の各行事の目標と成果の記述を中心に、事前アンケートや、振り返りシートの内容をもとに行う。また、抽出児として男子Ａ(活発で、悪口が多い。生徒の願いには「協力できるクラス」と書いた)を設定した。

(1)　自分の役割を自覚し、仲間の努力を認められるようになったか。（見通し１）

ア　実践の概要

学級委員を中心に話し合い、個人種目と選抜リレーの選手を決定した。この後、体育大会へ向けての心構えを話し合い、子カード①を作成した。体育大会の練習は体育の授業で行われたが、教師の空き時間を利用して、練習に立ち会い生徒を励ました。朝の会を利用して、みんながより力を発揮するため何ができるかを投げかけた。大会前々日、事前アンケートから「がんばっている生徒」を紹介した。体育大会終了後、振り返りを行い、子カード①に、体育大会の

成果を記入した。

イ　結果と考察

事前アンケートから、必ずしも体育大会が生徒にとっては楽しみな行事でないことがわかった。一方で、自分の出場種目に対しては、「一生懸命取り組みたい」「得点をとれるように頑張りたい」「みんなの力になりたい」「話し合って決めたので頑張りたい」「苦手だけどクラスのために頑張りたい」「みんなも頑張るから自分も頑張りたい」など前向きな回答があった。

資料３の「一致団結カード」の目標にあたる「よりよいクラスになるために、体育大会に向けて努力したいこと」の記述を見ると、「自分の競技を精一杯頑張りたい」「１点でも多く取るため全力を出したい」など自分の種目に前向きに取り組もうとしている生徒が12名いたほか、「練習を一生懸命頑張りたい」など、自分の出場する種目の練習に言及している生徒も８名見られた。中には「毎日１キロ走る」と宣言した運動の苦手な女子Ｂのような生徒もいた。このことから、生徒は体育大会で自分の出場種目に全力を尽くすことを自分の役割と捉え前向きに取り組めたと判断できる。

資料3　体育大会の目標と成果

「一致団結」カードの子カード①への記述状況

◎よりよいクラスになるために体育大会に向けて自分で努力したいこと
- 自分の種目を精一杯がんばりたい（10人）
- 1点でも多く得点をあげたい（2人）
- 練習をいっぱいする（8人）
- 失敗しても責めない（4人）
- 健康管理をしっかりする（3人）
- 応援をがんばる（1人）

◎次の一歩へ踏み出すために大切だと思うこと
- 協力し合うこと（14人）
- あきらめないこと（6人）
- 努力すること（3人）
- 相手を思いやること（2人）
- 集中すること、責任を果たすこと、楽しくやること（各1人）

仲間の努力を認められたかという点では、事前アンケートから「がんばっている生徒」としてＢの努力を知り認めている生徒が６名いた。他にも、苦手な種目に挑戦しがんばっている生徒や、リーダーシップを発揮している生徒の名前が挙がった。事後の振り返りでも同様の調査を行ったところ、事前事後をあわせて16名の名前が挙げられた。また、クラスのみんなと答えた生徒も８名いた。男子Ｃは「みんな」と答えた一人であるが、理由として「100Mを走っているときに、みんなの応援がきこえた！」と書いている。競技への真剣な取組を知り、応援し合う関係が生まれたことで、互いを認め合うことができたと考えられる。

抽出児を見ると、「よりよいクラスになるために体育大会に向けて努力したいこと」を「けがをしないこと」と考えている。この段階では、まだ、自分の願いである「協力できるクラス」を意識していない。「体育大会で努力できたこと」では「協力」と書いていた。

資料4　Aの子カード①への記述

体育大会で「一致団結カード」　（子カード①）

◎よりよりクラスになるために
体育大会に向けて自分で努力したいこと

けがをしない

◎クラスの仲間に呼びかけたいこと

けがをしない

◎体育大会で努力できたこと

協力

◎次の一歩へ踏み出すために大切だと思うこと

協力をすること

(2)　仲間の取組を認め、仲間の手助けができるか。（見通し２）

ア　実践の概要

子カード①に書かれた成果(資料３)として「これからも協力していくことが大切だ」という言葉が多かったことを確認し合い、生徒が班編成の話し合いを行った。班編成は誰とでも協力できるようにとの考えからくじ引きで行い男女混成の班とすることに決定した。また班のメンバーは班長以下一人一役で係の仕事を行うこととした。事前アンケートの集計結果を生徒に提示し、互いに「協力すること」、「自分勝手な行動をしないこと」を望んでいる生徒が多いことを知らせた。協力が必要となる場面では、「道に迷いそうになったとき」が多かったので、知らない土地で迷わないためにはどうしたらよいかを投げかけ、事前学習から協力することを話した。この話し合いをもとに、子カード②を作成した。また生徒の提案で、係を立ててバスの中でレクリエーションをすることに決まった。係には男女６名が立候補し、自主的に準備を

した。日光遠足の翌日、振り返りを行い、子カード②に日光遠足の成果を記入した。

イ　結果と考察

雨の中での遠足となったが、無事に班別行動が行えた。また、バスレクも盛況でゲームやクイズで盛り上がった。振り返りの中からも「バスのレクリエーションが楽しかった」ことやバスレク係が「バスの中でレクリエーションのためにがんばっていた」「みんなを楽しませようと努力した」などの言葉が挙がった。また、班別行動での係の取組について、班の中でお互いによいところを指摘し合うことができた。遠足の成果として(資料５)「協力すること」だけでなく「周りの人のことを考えること」や「自分で精一杯のことをすること」が大切だという意見が現れたことから、意識が自分の周囲の仲間に向き始めていると考えることができる。

資料5　遠足の目標と成果

「一致団結」カードの子カード②への記述状況

◎よりよいクラスになるために日光遠足で自分が身につけたいこと
- 協力すること、助け合うこと（8人）
- 集団行動をすること（6人）
- 自分勝手をしない（2人）
- 班行動をしっかりする（3人）
- 積極的に行動する（4人）
- 気を利かせること（2人）
- 正しい判断力、思いやること、息抜きも大切（各1人）

◎次の一歩へ踏み出すために大切だと思うこと
- 協力すること、助け合うこと（10人）
- 周りの人のことを考えること（6人）
- 自分で精一杯のことすること（5人）
- まじめに取り組むこと（2人）
- 集中すること、計画性、積極性、正しい判断、命の大切さ（各1人）

しかし、仲間への手助けという点では、前述のレクリエーション係のような例は別として、目立った取組は、ほとんど見い出せなかった。班の中でそれぞれの役割は果たせていても、雨の中の班別行動であり、自分の役割を果たすことで精一杯であったようである。

資料６から抽出児を見ると、「よりよいクラスになるために日光遠足で自分が身につけたいこと」「班別行動を成功させるために必要だと思うこと」のどちらにも「協力」と書いている。漠然と協力の大切さについては気付いているが、具体的な行動までは考えられなかったと判断できる。また、遠足後に成果として「日光遠足の班別行動で取り組めたこと」に「班のみんなのために協力した」と、「次の一歩を踏み出すために大切だと思うこと」に「クラスのために協力する」と書いた。具体的に協力する姿は表現されていないが、自分を取り巻く集団に関わろうとする姿勢が読み取れる。

資料6　Aの子カード②への記述

日光遠足で「一致団結カード」　（子カード②）

◎よりよりクラスになるために
日光遠足で自分が身につけたいこと

協力

◎班別行動を成功させるために必要だと思うこと

協力

◎日光遠足の班別行動で取り組めたこと

班のみんなのために協力した

◎次の一歩へ踏み出すために大切だと思うこと

クラスのために協力をすること

(3)　学級のために自分の役割を見出し、協力しながら目標を達成しようとしたか。（見通し３）

ア　実践の概要

10月後半から昼休みや放課後を使い本格的な練習を開始した。子カード②に書かれた成果を基に学級活動の時間に合唱コンクールに向けての具体的な協力の仕方を話し合った。小グループで出し合った意見を分類しながら確認し合った。合唱への心構えや、歌い方、練習への参加の仕方など、さまざまな意見が出された。この話し合いをもとに子カード③を作成した。最後の一週間は指揮者を中心に毎日放課後、教室での練習を行った。合唱コンクール後、振り返りを行い、子カード③に合唱コンクールでの成果を記入した。後日、完成された「一致団結カード」を持ち寄り、自分たちの取組について話し合い、今後さらに心がけたいことを全員が発表した。

イ　結果と考察

資料７の目標として「みんなと合わせること」のように、単に自分が努力するだけでなく、

周囲の仲間を集団として意識した言葉が見られるようになった。また「しっかり声を出す」のように具体的な取組を書いている生徒もいる。また、成果として「協力し合うこと」や「相手のことを考えること」を今後も生かしていきたいという気持ちが育っていることがわかる。

資料７　合唱コンクールの目標と成果

「一致団結」カードの子カード③への記述状況

◎よりよいクラスになるために合唱コンクールで自分が身につけたいこと
・協力すること、団結すること（11人）
・みんなと合わせること（10人）
・集中すること（2人）
・しっかり声を出すこと（5人）

◎行事を通して学んだことで日常生活に生かしたいこと
・協力し合うこと（16人）
・相手のことを考えること（5人）
・声をしっかり出すこと（2人）
・集中すること、責任感を持つこと、その場にあった行動、楽しさを忘れないこと（各1人）

資料８では、抽出児の変化も見られる。「行事を通して学んだことで日常生活に生かしたいこと」として「みんなの気持ちがわかるようになりたい」と書いている。合唱コンクールに先立って行われたマラソン大会で上位に入賞し、その努力を学級の仲間からも認められたことから、一層学級集団に対して積極的に関わり、協力しようとする心情が培われたものと考えられる。この生徒は、最後の話し合いを通して、今後さらに心がけたいこととして「今まで話したことのない目立たない人とも、いろんなことを話したい」と発表し、「自分の悪いことは、悪いと受け止め直していきたい」と感想を書いている。集団の中での役割という意識は十分ではないが、周囲の仲間と関わり合いを持ちながら自分を高めようとする気持ちが表れてきたと考えられる。

資料８　Ａの子カード③への記述

合唱コンクールで「一致団結カード」　（子カード③）

◎よりよりクラスになるために合唱コンクールで自分が身につけたいこと
みんなと協力

◎1年1組の合唱を完成させるために、自分が協力したいこと
声を合わせる

◎合唱コンクールで協力できたこと
みんなと「声」を合わせる

◎行事を通して学んだことで日常生活に生かしたいこと
みんなの気持ちがわかるようにしたい

Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

協力し合うことを柱に、行事をつなぐことで、自己の取組が集団に影響することを生徒が理解したと考える。今回の実践を通して、学級のリーダーとしての自覚を持つ生徒やその生徒を手助けしようとする生徒が現れたことも成果の一つである。行事への取組の記録を積み重ねたカードを介して生徒同士が互いの取組を見つめ合う中から、日常生活でも、互いのよさに気付いたり、改めるべきことの目当てを持てるようになってきたためと考える。

2　今後の課題

行事の中で集団を意識し関わり合おうとする気持ちは高まってきたが、日常の場面では、まだ十分に自己の役割を意識できない生徒もいる。一人一人の生徒が学級の中での役割を自覚して行動できるように指導をする必要がある。また、次年度に向けて、学級内のだけでなく学年内の生徒同志が互いのよさを認め合える関係を築けるように、指導を続けたい。

＜参考文献＞

井上　裕吉　編　『自主的な態度を育てる中学校の学級経営』　明治図書(1991)
倉田　侃司　編　『楽しい教室環境作り12か月　中学校』　明治図書(1991)